

第50回創大祭・第36回白鳥祭「創価栄光の集い」メッセージ

エラ・ガンジー

これから、ここに集う若者たちが、それぞれの役割を果たすために世界に旅立って行きます。そのような荘厳な式において挨拶する榮譽を与えていただき、ありがとうございます。

最初に、創価大学創立50周年おめでとうございます。そして50回目の創大祭おめでとうございます。本当におめでたいことばかりですね。

しかしながら、あなた達若者が外の世界に踏み出していくに際しては、私たちの目の前にある重要な問題に注目する必要があるでしょう。拡大する格差、失業、搾取、環境の劣化、不寛容、過激主義、怒り、暴力、そして大量殺戮兵器の開発競争。これらは、私たちが今日直面している問題の一部に過ぎません。そして、マハトマ・ガンディー（1869年生まれ）、ネルソン・マンデラ博士（1918年生まれ）、池田大作博士（1928年生まれ）、そしてマーティン・ルーサー・キング・ジュニア博士（1929年生まれ）もまた、これらの問題と向き合ってきたのです。

これら各人が、それぞれの人生そして生きた時代において人類が直面していた問題に対する大事な答えとして、ヒューマニズム（人間主義）を信奉していたのです。

結論を先に言わせていただければ、全てが悲観的だというわけではないということです。私たちの目の前には病んだ社会の悲惨さが広がる一方、世界各地で人間主義に基づいた活動を静かに根気よく続けながら、小さくとも意味のある変化をもたらしている何百万という人々がいるのです。エクナト・イスワランは、その著書「Gandhi on the Power of One」において次のようなガンディーの言葉を引用しています。「人類の偉大さは、世界を創り変える能力にあるわけではない。それは核の時代の神話に過ぎない。そうではなくて、私たち自身を創り変えられることにある。」私の親友で南アフリカ SGI 理事長のローレン・ブレイスウエイト・コボシャさんが私にこう言いました。「ガンディーが言った『自分たちを創り変える』プロセスはよく知っているでしょう。この内面の変革が『人間革命』です。勇気を出して小さく閉ざされた自分の人生の殻を打ち

Ela Gandhi（ガンジー思想開発基金 名誉執行理事兼議長）

破り、周りの人を励ましながら前に進んでいくことです。』

なぜこうすることが必要なのか、自分を変革するとどうなるのかについてももう少し詳しく説明させてください。それは、考え方を変えることによって、私たちの感情が変化し、自分の感情を上手にコントロールできるようになるということであり、感情をコントロールすることができれば、私たちの行動や反応が違ったものになり、それによって私たちの周りにいる人々からも違った反応を引き出すことができるようになるということです。こうして私たちが住む世界が変わっていくのです。

このような変化が起きるのは、私たちが自分の置かれた環境を「新しいレンズを通して」見たり「新たな思考方法」や感情で捉えたりするようになったからだけではありません。自分の内面が変わることによって、これまで考えつかなかった、自分にはとてもできないだろうと思っていたやり方ができるようになるからなのです。

この大学において幅広い豊かな教育を受けてきたあなた達は、ここに挙げた問題に対処するために必要な能力を身に付けていると言ってよいと思います。しかし、教育というものは皆さんが大学を離れたらそこで終わるわけではありません。私たちは皆、広い世界を経験しながら学び続けるのです。学ぶこと、そして人生を変えていくことは、死ぬまでずっと続いていくものなのです。

誰もが健全で幸せな生活を、という私たちの目標を達成するために絶対に必要であると思われる 3 つの考え方を、皆さんにお伝えしたいと思います。

1. 自分を批判的に見ることができる。そしてそれを習慣化する。
2. 中心的価値を「私」から「私たちと宇宙」へと変える。
3. 自己をコントロールする。

あなた達は活動しながら学んできたと思いますが、計画を成功に導くためには、常に評価を行い、そこで得た知見を基に新しい計画を実施しなければなりません。それは人生においても同様で、私たちは常に自己を批判的に見つめながら自分自身を評価し、自分の内面で必要な調整や変更を行っていかねばなりません。そうしないと、私たちの成長は止まってしまうからです。私たちは誰でも間違いを犯しますが、当惑する感情を抑え、間違いを認め、新しい目標を設定するには、決断力、勇気、そして誠実さが求められるものです。こういった教訓は誰も教えてはくれません。私たち自身が自己管理をしながら学んでいくものです。ガンディーは、バガバットギータの翻訳を解説する際に次のように書いています。「自己の精神は、黙想、謙虚、無私を実践することで涵養される…ヨガの呼吸法は精神をコントロールし、一意専心に至らしめるのに役立つ…私たちは、無私と献身の精神で行動しなければならない。」このことについては、当然皆さんも自

らの信仰に基づいて学び実行されてきたことと思いますが、これを実践することによって、自己を批判的に見ることができるようになり、そして過ちを認めた後に変わるようになるのです。

本日提起したいもう一つの重要なポイントですが、現在私たちが目にしている世界的混乱について、私は、自己中心的な考え方がその中核にあると考えています。私たちは、自分たちの行動が他人や地球環境や動物に与える影響について憂慮することなく、より安易な生活を選択することによって、幾つかの大事な問題をないがしろにしているのです。私たち全員が、中心的価値を「私」から「私たちと宇宙」へと変えていけば、世界に大きなインパクトを与えるでしょう。現代のテクノロジーによって人々の距離は縮まり、お互いが離れていることは問題ではなくなりました。ガンディーの時代には、ガンディーはインドという一つの大陸に専心していればよかったかもしれません。しかし現代においては、私たちは太陽、星、空気、水など周囲にある数多のもの、特に、コロナウイルスや今後出現してこの星における人類の生存そのものを脅かすかもしれないものに対し、心を配っていかなければなりません。遠いブラジルの熱帯雨林を焼き払ってしまうような人類の行動が、他の人々の生活そして環境や世界全般にどのような影響を及ぼすのか。こういった問題は、私たち全員が至急取り組んでいかなければならない問題ですが、自分たちの行動とそれが他の人々や世界に与える影響とを結び付けることによって、人々の関心が喚起されるようになるでしょう。

最後にお伝えしたいポイントは、このめまぐるしい世界、全てが緊急で走り回らなければならない世界、そして時間がお金に換算される世界、こういった世界が人々の心と体に悪影響を与えているということです。私たち自身がこの「急人類」の生活から抜け出すための自己調整を行っていない限り、人間はこのシステム—それ自体が人間を傷つけ、非人間化し、殺してしまうシステム—に使い尽くされてしまうかもしれません。

もしもこの生活から抜け出す道が見つからなければ、私たちはイライラしやすくなり、怒りっぽくなり、妬みっぽくなり、短気になり、そして時には傲慢になってしまうことを、私は自分自身の経験を通じて知っています。ここから対立や紛争といった状況が発生し、その結果として人類がその大きな渦に飲み込まれてしまうかもしれません。

もしも私たちが抜け出す方法を学び、こういった負の感情を自分でコントロールできるようになれば、幸福、満足感、自己充足感、誇りや自尊心を獲得するきっかけとなるでしょう。私たちが状況に対して性急に対応せずにいられる能力を修得し、自身の感情や行動を制御できるようになったのですから。このような状況においては、平和をより容易に達成することができるでしょう。

私たちは、壁を作ることをやめなければなりません。非常に困難な状況であっても、もっと交

流や議論を盛んにすれば、平和は訪れます。

私がこのようなことを言うのは、性別、人種、カースト、階級、宗教などに基づく違いをベースとした物の見方が幅を利かせることによりコミュニティが崩壊しつつある今日の世界にとって、それが重要だと思うからです。私たちは壁を作り、向こう側にいる人々のことを知りたせず、その結果として「us and them（俺たちとやつら）」症候群と言われる病気にかかってしまったのです。マーティン・ルーサー・キング牧師は自著に書いています。「私たちはこれからどこに向かっていくのだろう。混乱か、それとも共同社会か」

「我々は今、明日の姿は今日の姿という現実と直面している。今すぐにでもやらなければならないことが眼前にあるのだ。複雑な形で進展してきた私たちの生活や歴史においては、『遅すぎる』ことがある。先延ばしにすることは、今でも時間を盗む泥棒と一緒だ。生きていくなかで、チャンスを逸してしまい、虚ろに、無防備に、そして打ちひしがれて立ちすくんでしまうことがしばしば起こる。『人生の潮時』における波は残らずそのうち引いてしまう。進んでいく時間に向かって『止まってくれ』と必死に叫んでも、時間はどんな願いも聞かずに先を急いでいく。多くの文明が残していった白骨や残骸の上にかかれていたのは『遅すぎた』という悲痛な言葉…（だが）今の我々にはまだ選択肢が残されている。非暴力的な共存か、或いは暴力的な相互殲滅か。今回が、人類にとって、混乱かそれとも共同社会かを選ぶ最後のチャンスになるだろう。」この文章は 1968 年に書かれたものです。52 年後の今でも依然として真実を伝え続けているように思えます。

選択をすること、そして必要な行動を取ることに、今はあなた達が決められるのです。アカデミックな世界で過ごしてきた者として、あなた達には知識という武器があり、それを使って社会を建設することができます。あなた達は、この国そしてこの世界の未来のリーダーなのです。

私たちは自分なりの人間哲学に忠実でいなければなりません。南アフリカでは、「Ubuntu」と言います。これは、「あなた無しでは私は存在しない」、あるいは「人間同士の絆、人間に必要なもの、お互いを慈しみ合うこと」という意味です。皆さんの大学は、この哲学に基づいて作られたと確信しています。周りにあるきらびやかな富に目を奪われないよう、そしてこの哲学を忘れないようにしましょう。

最後に、世界中で起きている紛争、気候変動と人類の存続という大きな問題、そして核兵器拡散の危険といった課題に言及した深遠なメッセージからの引用で締めくくりたいと思います。創立記念日の祝辞として寄せられたメッセージの中で、池田博士がこう書かれています。「世界で起きている問題を考える時、私たちは何よりも最初に、人間一人一人の命、生活、そして尊厳がさらされている脅威に注目しなければならない…」さらに続けて、「牧口常三郎先生の思想の根

底にあったのは、この世界とは何をおいても人々が共に生きていく場所なのだという認識であった…」池田博士はさらに続けます。「あの会議、1975年1月26日のSGI創立会議において、ゲストブックへの記入に際し、私が出身国の欄に書いたのは、『世界』でした。」

何という先見性でしょう！

ありがとうございました。